

平成 28 年度 第 3 回 岡山県総合教育会議 議事録

1 日 時 平成 29 年 1 月 20 日(金) 〈開会：13 時 30 分、閉会：14 時 10 分〉

2 場 所 県庁 3 階第 1 会議室

3 出席者 知 事 伊原木 隆太
教育長 竹井 千庫
教育委員 田野 美佐 中島 義雄 上地 玲子
松田 欣也 梶谷 俊介

4 協議事項に係る出席者の発言

【知事】

本日のテーマは、「キャリア教育の推進について」である。現在、策定を進めている「新晴れの国おかやま生き生きプラン」において、将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合を生き生き指標に掲げ、キャリア教育の推進に取り組むこととしている。

キャリア教育は、子どもたちが職業体験や社会貢献活動などを通じ、課題の発見や解決に向けて、主体的・対話的に深く学ぶことで、社会的・職業的な自立を図るものであり、学習意欲の高揚や望ましい勤労観・職業観の育成にもつながるため、さらなる取組の推進が必要と考えている。

本日は、このキャリア教育の推進について、教育委員の皆さま方とも議論を進め、今後の取組の参考にさせていただきたいと考えている。

皆さま方から、キャリア教育の推進について、「ここは大事だ」、「このように思う」ということをそれぞれ教えていただきたい。

【教育委員】

小学校に行くようになると、だんだん現実を見てなかなか夢を持てなくなると感じる。小さいときから様々な業種の職業を知ることによって、将来の夢が広がるので、小学校のうちに、自分で大体の目標を付けさせるぐらいまで学校のカリキュラムの中でできればと思う。朝学習のときなどを利用して、「キャリア教育」という言葉ではなく、日々の中で絶えず職業を意識させるということが大事ではないか。

毎年、中学校 2 年生で職業体験、職場体験があるが、企業とのやりとりなどを、先生がお膳立てしてしまっている。生徒自身が行ってみたい企業を調べて、自分でアポを取り、そのフォローを先生がするというやり方に変えるのも、これからは大事なのではないか。

中学校で進路を考える際、自分が何になりたいかによって希望校を選択することもできるので、中学生の段階までに自分の将来を意識させる教育をさせていたらいいのではないかな。

【教育委員】

課題解決能力は、大学や社会に出ても求められる能力である。そのような能力が将来求められることを、できるだけ早いうちに認識し、重要性を感じてもらうことが重要である。また、課題解決能力を身につけるにあたって、地域とつながることによって、地域に愛着も湧き、自分の将来を明瞭にすることができると思う。そういう意味で、キャリア教育は非常に重要だ。

高校の先生や校長先生とキャリア教育についての話をした中で、インターンシップについては、マッチングが上手くいっていないという話があった。県として地域の企業と学校とのマッチングをサポートすることによって、インターンシップの選択肢が広がり、子どもにとって、より身近なインターンシップができるのではないかな。

【教育委員】

実際に企業体験などをすると、「こういう仕事に就きたい」という意欲が強まり、成績が上がったという話もある。目標をしっかりと持つことが、学力向上や、課題解決能力、人間関係力を学ぼうとする意欲にもつながっていくのではないかなと思う。体験をさせるのはすごく大事だが、何種類かの企業を体験できるのがいいのではないかな。大学でインターンシップに関わることもあるが、企業のリストアップを、まず私たちがしないといけない。自分で調べ、行きたい企業を決め、アポを取る方が課題解決能力は伸びるのではないかな。

【教育委員】

高校段階のキャリア教育については、産業界との連携をもっと進めていかないといけないのではないかな。去年と一昨年、津山市に設置されている県立学校4校の校長と、それぞれの産業界の方々で意見交換を年2回行わせていただいた。

その中で、普段学校と企業の情報の接点があるようでないと感じた。キャリア教育を学校側の先生がもっとできるように、先生を育てていかないといけないのではないかな。企業の方に来ていただいて、その時間だけ業種のお話をするのではなく、教育の体系の中でもっと深みが出るようにしていかないといけない。

実業高校は企業側との接点を多く持っているが、普通科はなかなか接点を持っていない。また、進学率の高い学校では、地域の企業を知らずに大学に進学してしまう。進学をする方にも、地域の企業や産業をしっかりと理解してもらえる機会を設けないといけない。地域の企業を知らないまま東京や大都市圏で就職し、岡山に帰ってこないという方が多い。津山の高校3年生には、将来津山に帰ってく

るよう、企業などの資料を送っている。去年のデータでは、卒業して進学した方のうち、502名が登録している。

【知事】

大学進学者のうち登録している学生は、どのくらいの割合になるのか。

【教育委員】

約1,000人が進学するので、約半数が登録していることになる。登録者には、地域の企業情報が流れており、このようなつながりを持つことがとても大切なのではないか。

【教育委員】

キャリア教育というと、学校の先生がやや困惑しているように思う。まず、先生が社会を知ることが大事なのではないか。学校の先生は、学校という社会の中だけで育ち、教員になる人が多い。先生が職業体験等を企業と一緒に組んでいく中で、社会と子どもたちの学びをどうつなげていくのかというメッセージを出せるようになることが、非常に大事ではないか。何のために学ぶのか、今学んでいることが自分の将来とどう関わっていくのかを、どのようにして先生が見せていくのが大事だと思う。

地域に戻ってもらうには、小中学校の段階から地域の課題を自分たちも関わって解決していくような体験が大事になる。そういった中で、地域の課題を小中高で、大人も一緒になって連携しながらやっていく。今の子どもたちは同年代の横のつながりは幅広いが、異年齢とのつながりが非常に弱い。異年齢とのつながりがないと、社会に出たときに異質な年齢差の中で、上手く表現が出来ない。子どもうちから地域の大人など、家庭以外のところでのつながりを体験していくことが非常に大事なのではないか。地元とつなぎながら地域課題と学校の関係をどれだけつないでいくかということが、これからのキャリア教育には大事になってくると思う。

【教育長】

インターハイで大活躍する高校生やスマホサミットに参加している中高生の姿を見てきたが、失敗を繰り返しながらも、チームワークを築きながら、成果を上げていた。そのような経験の場を与えれば、どんどん活躍をしていくし、意欲を持つ子になる。

今、子どもが求められていることは、アクティブラーニングと一緒に、課題を見つけて、チームで協議しながらよりいい解決策を打ち出し、それを実行することである。地域課題という話が先ほどあったが、これによって地域に愛着ができてくるし、同年代や大人と一緒にすることによって仲間が増えていく。これが、

地元に戻ってくる一つの大きな要素になる。子どもの活躍の場を学校の内外にしっかりと作っていききたい。

また、学校間で差があるので、教育委員会としては学校間の温度差を縮めていきたい。普通科でも、倉敷南高校や矢掛高校のように、熱心にやっているところがあり、いい取組は共有していきたい。

こういう仕事をして、いろんな人と付き合うようになって変わったかもしれないが、私も大学を出て、即教師になったので、世間からは非常にずれていたかなと思う。教師の視野を広げ、子ども自身にも、場を設けて、自らがやっていけるような、そういうことがキャリア教育につながっていくのではないかなと思う。そういったことを、これからの施策でしっかり取り組んでいかなければならないと思う。

【知事】

このテーマについては、何か大きく教育委員会を二分するような論争という感じは、全然していない。具体的に「このようにしたらもっとうまくいくのではないかな」「もっと頑張れ」といったお話なので、随分エールをいただいた形かなと思う。

ここで、あえて確認しておきたいのが、教育において「教育の意義はどこにあるのか」ということである。

たぶん多くの方は、社会で活かされ、人生で活かされて、初めてその教育に意味があったということをおられる方が多いのではないかなと思う。キャリア教育を積極的にすることで、意欲が高まり、成績が上がったというお話が先ほどの委員の方々からもあった。具体的に見えてくることで大きく変わるといったことは確実にある。

とりあえず、学校でいい成績を取っていれば、「一番有利な進路を選べる」「得ができる、ずるができる、楽ができる」ということは、目的として好ましくなく、強いモチベーションもなかなか出てこない。方向性の意味でも、意欲の面でも、できるだけ具体的なイメージを持ってほしいということが、本当に共有されているのかなと思った。

【教育委員】

色々な具体的な動きが、民間の中でもあると思う。先ほどの高校の事例や、例えば「NPO法人～だっぴ～」では、中学生に地域の大人と一緒に場を与えて地域課題を考えさせるようなことをしっかりやっている。その中心は大学生世代であるが、その世代がモデルを見せ、中学生と異世代でグループ活動をするにより、中学生がもっと自分たちはやれると感じてもらえることもできる。子どもたちは、「大人はもっと本音を伝えてほしい」「私たちの意見を聞いてくれ」と話し、そういうことをやるために、「自分たちはもっと勉強したい」などの声が子どもた

ちから出る。異年齢で一つの課題を議論する中で、お互いに触発され、それに参加している大人の方も子どもたちからかなり刺激を受ける。もっと子どもと大人が対話する場や、一緒になって話をする場を作っていかなければいけない。それが、単なる学校の中だけ、学校の先生と子どもになると、どうしても対等ということにはならない。これが地域課題みたいなものを一緒にやると変わってくる。

岡山県内にも素地となるような色々な動きがあるので、好事例を共有して、もっとやっつけようということになれば面白いと思う。

【教育長】

学校の立場ということで言うと、校長の意識が高いところは変わりやすいが、仮に校長の意識が高くても、「何でこのようなことをするのか」「授業時間を確保する方が大切だ」という教員の意見が強い学校や、逆に色々ないい取組を教員がやりたいと思っても、管理職が「そのようなことまでする必要はないのではないか」という意見を持っているなど、学校の中が一つになるのは非常に難しいと思っている。積極的にいい事例を示すために、中学生や高校生、先生も一緒になったキャリア教育の発表会みたいなものをやれば、来た人や映像を見た人が「いいな」と思う。そういう仕掛けが要るのかなと思う。

学校は時間数が限られていて忙しいので、「どこでやるのか」ということもある。総合学習もあるし、県立高校の生徒は、卒業までに1週間程度の社会貢献活動をするということを決めているので、インターシップやボランティア、奉仕活動でもいい。それが、実はキャリア教育にもなってくる。時間は、夏休みでもいい。あわせて、学校に対して、バラバラに言わずに、トータルで示していかなければいけない。

【知事】

インターンシップ等で、どこに行くかによって、随分違うタイプのキャリア教育になる。どんどん授業数を増やせばいいというものでもないと思う。

【教育委員】

県の教育委員会とすると、やはり校長先生に変わってほしいのだと思う。先生にももちろん変わってもらわないといけないが、その前にまず、校長先生に対して我々がどう言うかという話であり、そこが変われば少しは意識が変わると思う。校長先生にもっと社会との関係をつくっていただき、それからキャリア教育の重要性を認識していただく。それについては、もっと教育委員会が強く言うところではないかと思うので、ぜひそうなるように期待したい。

【教育委員】

校長先生が学校経営方針を立てられているが、一つの学校経営の在り方がどうあるかといったときに、もっと外のことを知って組み立てていくということがとても大事なのではないかと思う。

例えば、なかなか学校の立場で商工会議所に入ることはできないかもしれないが、オブザーバーのような形で入ることで、校長先生が接点を増やすこともできる。また、地域のロータリーに、月に一回でも出席できる仕組を我々が作ってあげると、幅が広がっていく。

また、先日、「おかやまテクノロジー展」が開催されたが、どれくらいの先生が参加したのか。

【知事】

今回、高校生は随分参加したようだ。

【事務局】

去年は3校だったが、バスの補助も出しており、今年は9校が参加している。

【知事】

高校生が、目を真ん丸にして見ている姿もあり、いい刺激になっている。

【教育委員】

そのような機会をどんどん与えてあげられることはいいことだ。

校長先生がそれぞれの学校組織のトップとして、そのような場に参画していただけるのはいいことだと思う。

【知事】

上手くプログラムを組み、校長先生以下が、積極的に参加してくれると、キャリア教育はすごく上手くいく。そもそも、そうでなければ、ゴールのイメージがないままにやっていることになる。授業の場や学校で上手くいくことと、社会で上手くいくことがずれていればずれているほど、残念なことが起きやすい。これについては、皆さんから一致して「しっかり頑張れ」というメッセージをいただいた。しかし、現場からすると「ただでさえ授業が忙しいのに、これ以上色々な活動を詰め込まれるというのは困る」と思っている先生はたぶん多い。どこを見に行ってもいいというのではなく、やはり有意義なところに行くべきであり、どこを見に行ったら生徒の目が変わるのか見極める必要がある。頑張る学校応援事業ではないが、成功事例と失敗事例の共有をして、少しずつアップデートしていくのは、大事かもしれない。

【教育長】

どうしても、目先の労務負担に目が行って「大変」となるが、本当にいい教育活動をやっていると、生徒が前向きになってくる。これほどやりやすい、やりがいのあることはない。キャリア教育、外部との連携でも、先生が全部お膳立てをするよりは、子どもが自らやる方がいい。何もかもお膳立てをし過ぎているのではないかと思う。

【教育委員】

結構学校の先生も地域と連携していくという姿勢だが、保護者の中には、「キャリア教育というのは何？」と思っている方も多いと思う。小中学生の子どもにとって、親の意見はすごく大きいので、「自分はこんな職業に就きたい」と言っても、「駄目」と言われたら諦める子もいる。やはり、県としてやっている事業なので、周辺の保護者にも、こういうキャリア教育をやっているということをもっと周知してほしい。高校になると保護者も全部高校任せで、高校がどういうことをやっているのか全然知らない。学校のやっていることをもっと周知し、保護者が一緒になってやっていく取組も、これからは必要になってくると思う。

【知事】

本筋からちょっとずれるかもしれないが、「夢から現実」というのはあると思う。小学生なら、「将来の夢はウルトラマン」でもいいと思うが、少しずつ現実になっていくのは大事だと思う。

中学でやっているところまでは、どんな仕事をするにしても大事なことなので、それがサーカスの団員になりたいとか、何でもいいが、「それなら、全部5教科が関わってくるよね」と言えば随分違うので、その辺はテクニックかなと思う。今やっていることなんて意味がないと勘違いしてしまうと、本当はそうではないので、もったいない。今やっていることが、いかに基礎として大事かを伝えるのも大事だ。自分の今の努力と将来の夢、あこがれ、目標がリンクしているかどうかで、全然違う。

あともう一つは、つぶしが利く夢を持っておいてくれると、親としては安心だと思う。これが駄目でも、そのための努力の8割使い回しが利くと、すごく安心感を持っていただける。そして、それが地域の振興にもつながると、我々の立場からすると大変ありがたい。

【教育委員】

子どもの頃の夢を否定しないのは、大事だと思う。夢はどんどん変わっていくが、変わるたびに、その根底にあるものは何かと聞くと、色々と子どもなりに考えている。常にすべて上から否定せずに応援してあげることが、親教育ではないが、できていければいいと思う。

【知事】

大変きれいに締めていただいたので、今回の議論は終了にしたい。
次回の会議については、事務局から願います。

【事務局】

次回については、またご連絡をさせていただきたい。
よろしく願います。

【知事】

では、以上をもちまして、第3回岡山県総合教育会議を終了する。
どうもありがとうございました。